

# 回会報

160号

新日本美術協会

## 第四十一回新日美展を終えて

実行委員長 増野喬

第四十一回新日美展は10月5日をもって無事終了しました。出品総数は昨年より増加、作品も大作が多く充実した展覧会となりました。

参議院議長賞、衆議院議長賞と大きな二賞が加わって、それにふさわしい力作が出品されました。当初掲げたテーマ、見やすい展示、公平な審査、来観者との交流について皆様方のご協力をいただきました。見やすい展示につきましては各室のコンセプトに基づき展示し、見やすいとの声もいただきました。審査につきましては、会員、一般作品と区別なく審査され、それぞれ賞にふさわしい作品が選ばれました。

来観者との交流は、芳賀先生のギャラリートーク、山崎委員のワークショップ、土屋委員の色彩についての講演と三項目にわたって実施されました。芳賀先生のギャラリートークは、それぞれの作品について熱心に解説され、又出品者の質問もあり予定時間をオーバーする程でした。山崎委員のワークショップは予定人員を上回り2組に分ける程の人数で参加者で用意した資料も不足するほどの盛況でした。来観者との交流は、当初の目的を達成したと思います。関係者皆様お疲れさまでした。

四十一回展の反省事項は多々あります。ご意見をいただき今後には反映させたいと考えます。四十一回展にあたり委員、会員の皆様のご協力と、事務局の方々の絶大なご協力を頂きました。とりわけ、リスト作り、画集作り、会計業務、搬入搬出作業等、献身的な努力をされた方々に敬意とお礼を申し上げます。

事務局  
横浜市港南区港南台  
1-39-5  
鈴木忠義方  
Tel.045-832-0504  
  
編集委員  
小高峯夫  
富岡ネム  
大石 亨  
四方公子  
早田美智子  
  
原稿常時募集  
次号平成30年2月予定

41回展総評(表彰式での外部委嘱審査員  
お二方の講評を要約して一部を掲載しました)

中野中先生 美術評論家

短時間で鑑賞した講評なのでそのあたりを付度していただきたい。

今回から参議院、衆議院両議長賞が初めて加わったとのこと、会幹部の方のご苦勞があつて実現したものと思います。その第一回目の参議員議長賞の早田さんの道・その先へは、作者自身の一本道であり、新日美の道を暗示しているようにも思える。広々とした景観に50%を超える緑の草むらの道や木々が爽やかに表現されとてもいい。石川さんの衆議院議長賞 燦竹造喰籠は色合いがとてもいい、殆どないと言われる煤竹を探し、洗って、こすって磨いて出された風合い、ご苦勞があつたと思います。難しい素材だがシンプルな調和がある。文部科学大臣賞の小高さんの作品は海辺の二人の人物、一部に波をかぶせた表現、今という時間、これからの時間、とりつくりの難い異次元の世界、発想がいい。東京都知事賞の小柳さんの「古都好日ハイデルベルク」は構成がしっかりしている、絵の具の付きもよくいい作品だ。全体に力が入りすぎた、何処かに転調があるとなおいい。東京都議会議長賞の上野さんの作品は昔むした古木の並木に差し込む光をうまく捉えた、深遠な雰囲気があった木々によく出ている。同議長賞工芸の倉田さんの壺は紺碧色がとてもいい。そこから浮かび上がる菊花紋は素晴らしい。新日美大賞の千木良さんの作品は地表を低くとらえ天馬の塔がそびえ立つ構成で空間が生きた。広場に母子を配したのが効いている。子供たちの歓声がきこえてくる様だ。

## 芳賀文治先生 元東京造形大学教授

今回初めて参議院、衆議院議長賞二つ加つた。新日美はこれまででも文部科学大臣賞、東京都知事賞、東京都議会議長賞という大きな賞が多くあり応募する人には大きな励みになっていると思う。これは国から新日美が認められたという事であり、それにこたえる責任もあるという事だ。このような賞はなかなか貰えるものではなく、事務局長の鈴木さんが何回も面倒な手続きを辛抱強くやって得たご苦勞の賜物です。これにこたえる様頑張ってほしい。

例年講評が絵画部門に多く傾き工芸部門が省略されていた、もっと工芸の方へという声があつた。工芸について少し申し上げると、工芸は日々の生活の道具として始められたもの、もつと前は仏教の道具で貴重なものだった。現代では物が大量生産され大量に消費されている。大事に使われていない傾向がある。ものを大事にするという点では手作りによる工芸品は一品生産であり、生涯に残る、その時しかできない貴重なものである。

三越で私の学生時代の友人で大坂弘道氏(人間国宝)の工芸展が催されている。拝見したが技術が素晴らしい、鍛錬の賜物です。工芸ではまづ技術が優れていること、素材の良さを生かすこと、そして用と美の表現力が問われる。例えば木目を生かすとか、柔らかさ、硬さなど生かす技術。石川さんの煤竹の籠は二、三〇〇年たった茅葺の家で燻された竹、なかなか手に入らない貴重なもの。竹にはまき目ひら目とあるが表面を重視した品の良さが出ている。倉田さんの菊花石文様の壺はおおろが美しく印象深い。藤田さんの母なる海は大きな器を感じ、大きな波を銀箔で表現して素晴らしい。福岡さんの大皿は釉薬の自然の流れをうまく利用して成功している。佐藤さんの木工作品はいわゆる指物技術で、根気よく丁寧仕上げている。他にギャラリーで話さなかったが良いと思った作品を上げると、津国さんの紅葉風景、岡さんのドラム缶の絵、柳本さんの錯覚要素を含んだ風景画、彫刻では森本さんのモダンな形が印象に残った。

## 新委員紹介



篠 光定(絵画)  
東京支部会員

この8月に委員として委嘱いただきました、篠 光定と申します。

4年前に新日美をネットで見知って以来、スケッチ会、東京支部展、新日美展と参加させていた絵を描いてきました。

大学時代に同好会で油彩画を少し描きました、その後長いブランクを経て又絵を始めた、しかも本格的に描きたいと思う様になりました。仕事の合間に俳句を作ったり、ダンスをしたりと興味を持ったことにチャレンジをしています。これらの経験や自分の思い等を、絵の表現に落とし込みたいと思っています。

初代中尾不二夫会長は、創立の原点として公正で自由な気風の会、美術分野で存在感のある会にする」と常々仰っていたと伺っています。しがらみのない会という気風や、美術団体として国にも認められている事も、先輩の方々のご努力によつてその伝統が培われてきたからだと思えます。私は入会后に色々な方々とお会いをして刺激をいただき、生活感や芸術に対するお考えと共に、その作品を拝見してきました。そして自分自身の作品を創りたいとの思いも強くなりました。

作品の魅力が高めるには、常に自身を改革しエネルギーを蓄えなければと思います。各個人の進取の気持ちや作品が集まって、全体の組織のパワーにつながると思っております。

委員として今回、41回新日美展に参加させていただきます、その思いがより強くなりました。自分に何ができるのかを考えながら、若輩、微力ではありますが、会のお手伝いをさせていただきます。と思っておりますので、宜しくお願い致します。